

500ミリの豪雨を集めて木曾川の清流も濁流うずまく

停滞前線のもたらした “大いなる遺産”

□思わざる伏兵現る

11号台風は無事通過した。そして荒縮切も一応完了した。ところがこの安心も束の間、停滞前線という予想もしない曲者がこのあとに現れたのだ。

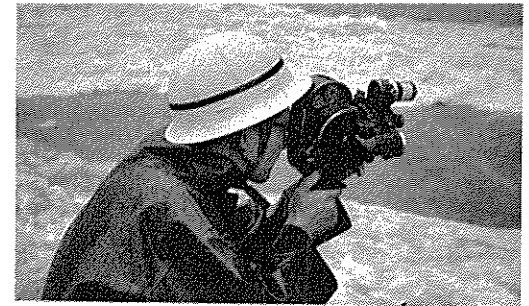
24日昼頃、いやな雨が降りはじめた。と思っていると、夕刻から次第に強くなってきた。活潑な停滞前線が動き出したのである。しかも、これが台風以上の“大いなる遺産”を残していったのだから、精密な人間の計算も、自然の気まぐれにはまだまだかなわないという外ない。日雨量を示すと、御嶽山では24日252ミリ、25日301ミリ、26日46ミリ、計599ミリ、またダムの上流部滝越付近ではそれぞれ207ミリ、130ミリ、49ミリ、計386ミリという記録的な豪雨、思わざる伏兵の強襲を受けたわけである。

□荒縮切流失

24日深夜滝越付近に集中した時間雨量27ミリによって、それまで流量30トン程度の静かな王滝川はたちまち奔流と化した。25日午前1時225トン、同3時には一挙に778トンと増水、この濁流はひとたまりもなく荒縮切を押し流した。

□飯縮切も中央部流失

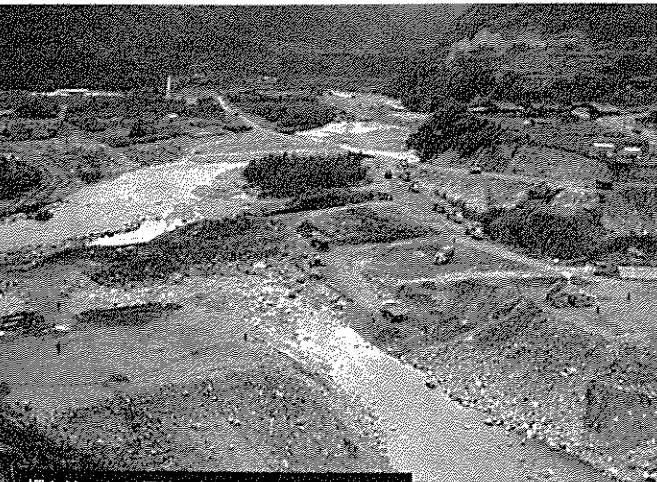
続いて25日から26日朝にかけての豪雨は、滝越で156ミリ、御嶽山では実に301ミリに達した。上流部の三浦ダムでは、25日午後10時から放流を開始したが、26日正午に至ってついに飯縮切堤もその中央部を押し流された。60年に一度といわれる豪雨であるから、もはやいかなる防護策も役立たなかったに違いないが、それにしてもこの“停滞前線”というのは手のつけられぬギャングのような自然の暴力ではある。



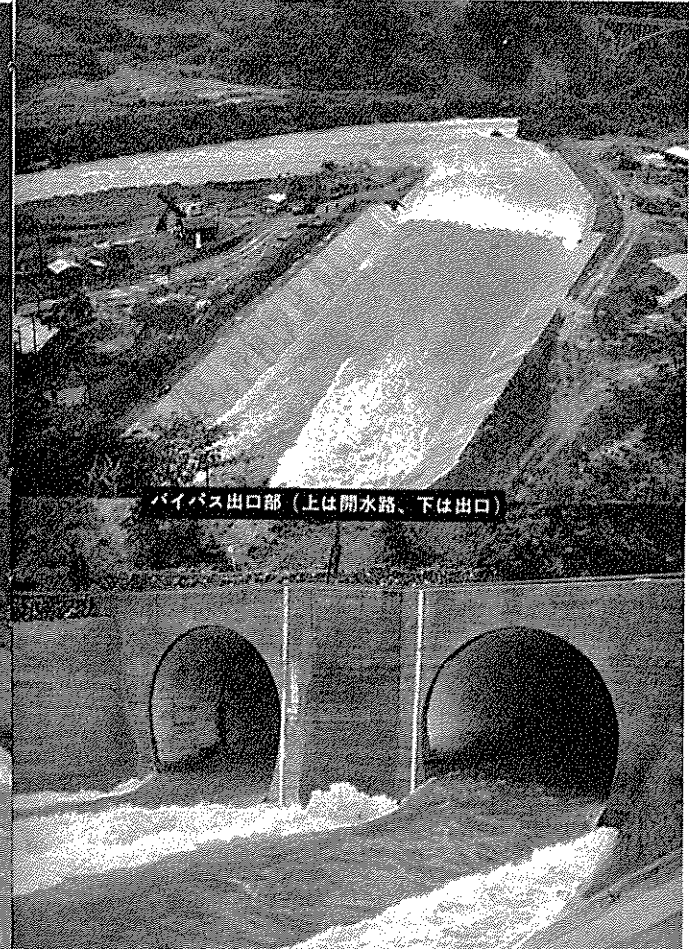
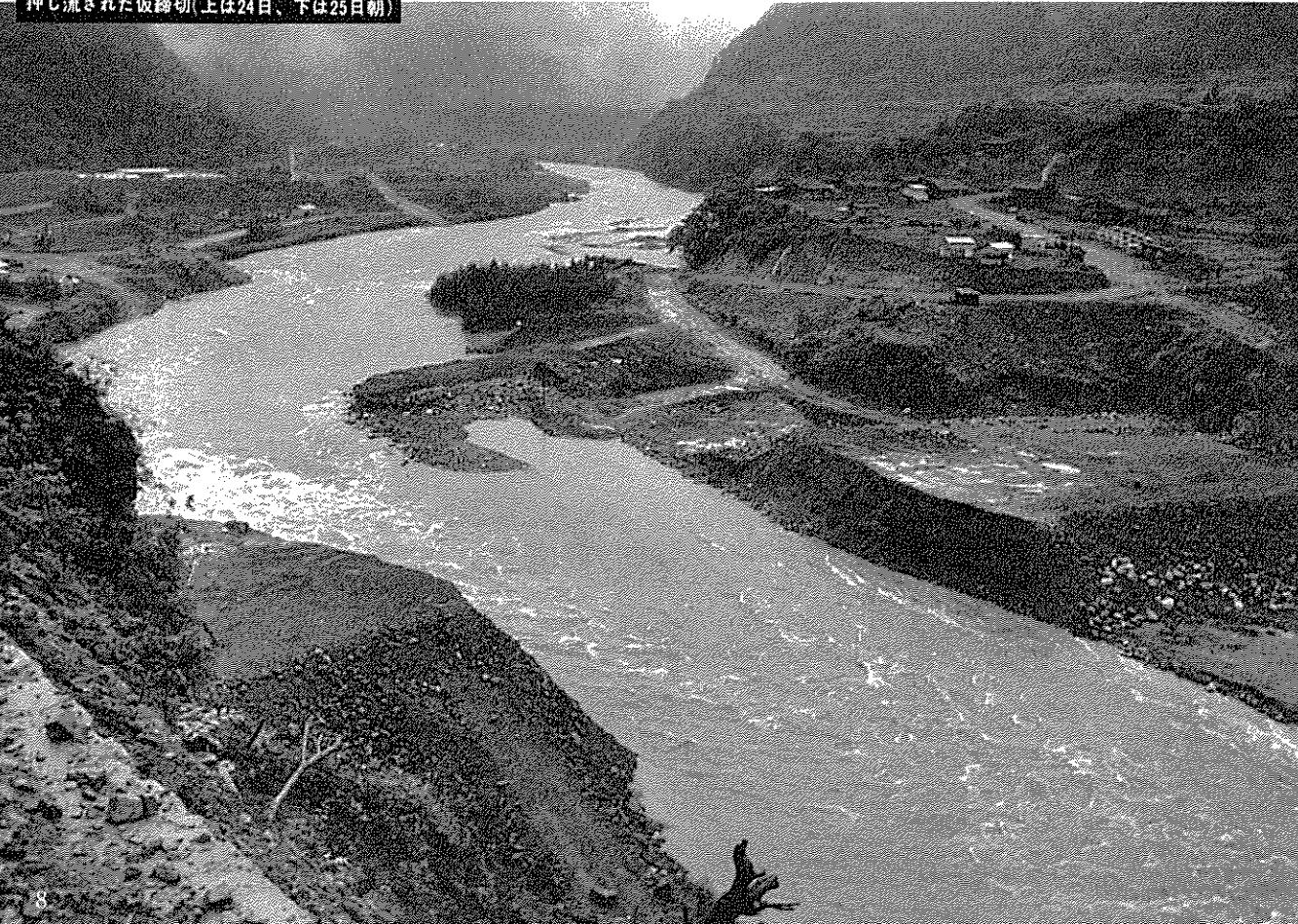
折から記録映画の撮影に來山していた日映新社のカメラマン、勇躍して豪雨の中をぶっつけ本番



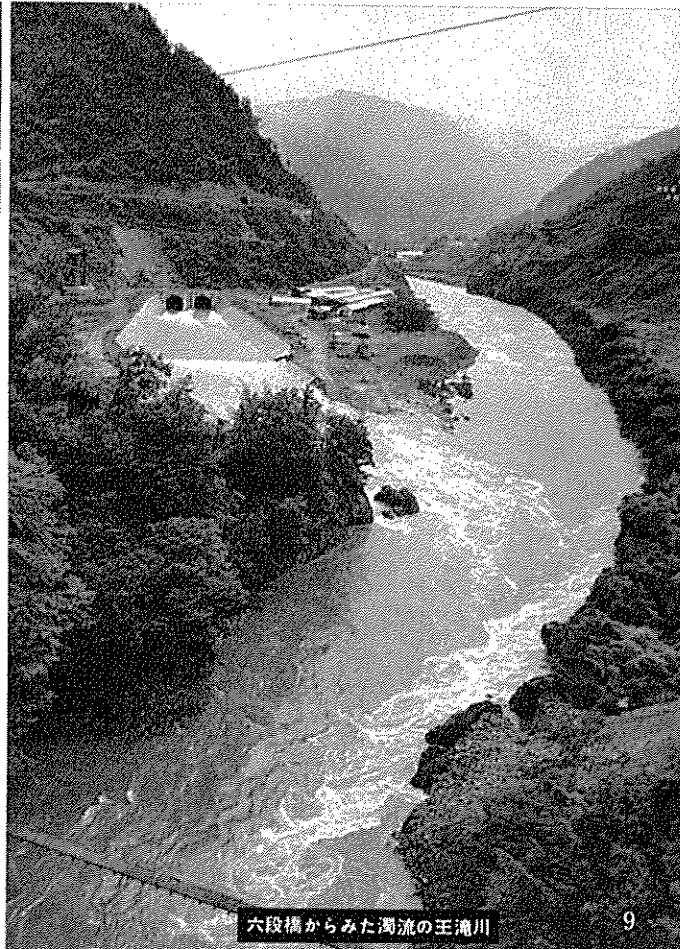
かれがれの王滝川も一朝にして濁流と化す(牧尾橋上より写す)



押し流された飯縮切(上は24日、下は25日朝)



バイパス出口部(上は閉水路、下は出口)



六段橋からみた濁流の王滝川